

竹中ナミ氏に聞く、 「相模原市の障害者施設殺傷事件」で考えたこと

●聞き手：吉井 勇・本誌編集部
●構成：渡辺 元・本誌編集長

チャレンジドは誇りを 持って生きている

7月26日に発生した相模原市の障害者施設殺傷事件で容疑者の男は、「重複障害者は不幸であり、不幸を減らすために殺害した」という趣旨の発言をしている。都知事選で在特会系候補者が11万票を獲得するなど、社会的多様性を尊重する価値観が揺らいでいる今日、容疑者が優生思想の影響を受けているとみられる今回の事件は、重い問いを我々に投げ掛けている。チャレンジド（障害者）の就労を促進する活動に長年取り組み、自身も重度障害者の娘と共に生きてきた竹中ナミ・社会福祉法人プロップ・ステーション 理事長に、今回の事件を受けて考えていることを聞いた。



障害児の娘を「連れて死ぬ」と迫った父が私に決意させた

娘の麻紀は産まれて間もない1ヶ月検診で、脳に重い障害があることが判りました。それを私の父に言ったところ、「わしはこの娘を連れて死んだら！」と大騒ぎになりました。

私はものすごく悪い不良少女でした。でも父にも母にも全然怒られたことはありませんでした。悪い娘でしたが、そのまま受け止めてくれました。そのような家で育ちましたから、私は親というものは子供を無条件に認めて受け止めるものだと思っていました。

それなのに父が、生まれた赤ちゃんに障害があると言った瞬間に「連れて死ぬ」と言ったものですから、私はびっくりして信じられませんでした。「何言うてんの」と言ったら、父は「こういう子を育てると、お前がごっつい辛い目に遭う。わしはお前がかわいそうで、見とられへん」と言いました。

私はとにかく不良だったので、世の中のルールはそうかもしれないけれど、私は絶対に嫌だと思いました。「父ちゃんはそない言うけど、絶対楽しく暮らせるから。とにかく大丈夫やから、心配せんでええから」と言って父を落ち着かせました。

父は本当に気の弱い優しい人でした。私がちょっとでも弱っている感じを見せたら、父はすぐに娘を連れて死んでしまうと思いました。私は生まれたばかりの娘と父をいきなり失う

竹中ナミ

社会福祉法人プロップ・ステーション 理事長
財務省財政制度等審議会 委員

ことになるわけです。それも障害が理由で。だから、私の中に弱音を吐くという選択肢はまったくなくなりました。娘を連れて死ぬという選択はありませんでした。

当時、障害のある子供の父親や母親が、その娘を連れて死ぬということがよくありました。私の娘は5、6歳の時に施設で早期訓練を行っていましたが、一緒に早期訓練をしていたお母さんと子供が今日は来ないと思ったら、昨日の晩に心中していたということもありました。私たちが暮らしていた西宮は都会でしたので、障害児に対してそれほどえげつないいじめありませんでしたが、田舎では座敷牢に入れておくといったことが普通に行われていました。

そのような時代でしたから、父は私と娘をかわいそうに思い、娘を連れて死ぬと言ったのかと最初は思っていました。しかし年月が経ってから気づいたのは、あれは父が命がけで私を脅迫したんだなということでした。私は天邪鬼でした。「頑張って育てよう」というのではなく「連れて死ぬ」と言ったら、天邪鬼の娘は腹をくくって娘と生きていくだろうと考えたのでしょう。今は父がそうやって私と娘を守ってくれたんだとわかります。

娘に対する差別や蔑視をどのように克服したのか

当時はチャレンジドに対する差別や蔑視がすごく強くて、障害のある本人も家族も小さくなって生きていかなければいけませんでした。私はその後西宮から夫の実家があった田舎に引っ越しましたが、ここでは「あの家には代々悪い血が流れている」というような噂が立ちました。娘は発作的にぎゃーっと泣き出すことがありました。田舎は雨が降ると村中がしーんとしています。そんな中で娘が泣いていると、「あの都会から来た女は、娘をいじめている」ということも言われました。

だけど田舎の人は、こちらが懐に飛び込んでしまえば逆に理解して、可愛がってくれるようになります。私は娘をバギーに乗せて、息子（編集部注：本稿コラムの竹中宏晃・社会福祉法人プロップ・ステーション 常務理事事務局長）が通っていた小学校に遊びに通いました。運動場を走り回ったり、教室に連れて入ったりしました。先生は見るに見かねて、「いっしょに給食食べるか」と言ってくれました。母親が毎日教室に入ってくるので、息子はすごく嫌だったと思いますが（笑）。校長先